

国立国語研究所学術情報リポジトリ

〈報告〉漢字を習うか漢語を習うか：
語彙に基づいた漢字教育

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-03-15 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: トリーニ, アルド メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00000942

漢字を習うか漢語を習うか——語彙に基づいた漢字教育

アルド・トリニー

私はイタリアのヴェネツィア大学で古典語を教えています。ヴェネツィアは水の都として知られています。私は漢字、日本語を教えているわけではないのにどうして漢字についてお話しするかというと、日本語教育に携わっていたことがあり、漢字教育についていろいろな論文を書いていたことがあるためです。そのことを思い出して、漢字教育はどうあるべきか少しお話しします。

問題の定義

ここでは、非母語話者、非漢字圏学習者、成人教育の日本語漢字教育を対象としています。日本語教育学では、普通、「文字教育」ということばがありますが、文字教育とはなんなのでしょうか。「仮名教育」と「漢字教育」が、学習プロセスのすべてになっています。それは、「文字を知っていれば」日本語が読めるという前提に基づいたアプローチです。しかし、「文字を知っているから」といって、日本語を読む能力が高いという結論はだせないと私は思っています。漢字教育では、漢字を一つひとつ「形、意味(義)、読み(音)」を記憶して習います。これは普通の漢字教育です。読む際に、習った漢字の「形」を認識して、

「意味」と「読み」を思いだして、多数の選択の中で、前後の漢字と組合せ、最終的に「読む」ということにより、意味と読みを決定します。普通はこういうプロセスといえます。

ちよつと簡単な例ですが、二つの漢字でできた「東京」ということばです(図1)。「東」があつて「京」があるのですが、一番使われている読み「ヒガシ、トウ、アズマ」を並べて、この三つのなかで「トウ」という読みを選んで、「京」も「キョウ、ケイ、ミヤコ」のなかから一つ選んで、一緒に組み合わせ「トウキョウ」と読みます。同じように英語の場合だと、GOODという簡単なことばは、 $G(=g)+OO(=o)+D(=d)$ で、 poG と noG の形を見て、音を思い出し、OOは「o」と読んで、組み合わせで「ぐつ」と読みます。本当にそのような読み方を習うのでしょうか。



アルド・トリニー (Aldo TOLLINI)

カ・フォスカリ大学准教授。ヴェネツィア、イタリア。専門は日本古典語。2002年から2006年までイタリア日本語教育学協会会長。著書は、『黎明期の日本語書記言語と漢文』、(上智大学国文学論集、平2012年)、『上古・中古時代の「さやけし」と「さや」語群をめぐって』、(総合研究大学院大学・日本文学研究専攻、2010年)、『表記と表現—万葉集における多義性用字法の分析』、(国学院雑誌、2007年)、ほか。

か。どうして「トウ」の音を選んで、「アズマ」を選ばないかという問題です。外国人として非漢字圏の学習者として私が漢字を習ったときに、そういう疑問があったわけです。

それだけではなく、たとえば、これも一つの外国人としてのアプローチです。「新東京国際空港」という簡単なセンテンスは、「新+東京+国際+空港」という文字の組合せになっています。つまり、**図2**のような仕組みです。「空港」は一つのことば、「国際」も一つのことば、「国際空港」は一つのユニット、単位になっています。「東京」は一つのことば、「新」も一つのことばだけで一つのことばになっています。つまり、「新+東京」「国際(空港)」「**三**」です。もう一つの読み方でいうと、新しい東京にある国際の空港です。

しかし学生は、「新東京国際空港」という漢字列を、「新東+京」、つまり「新しい東」の京と読む可能性がありません。なぜ、新しい東と読まないのか。これは、日本人には当たり前のことです。母語話者ですから当たり前のことですが、私たちは母語話者ではないので、どうやって区別するか、どうやって組み合わせたらいいかは、やはりわかりづらいです。「新しい東の京」と読む可能性があります。本当に読むプロセスは、漢字を一つひとつ読んで組み合わせるのか、強い疑問を私は抱いています。

漢字能力とは

漢字能力というのは、漢字を一つひとつ読む能力に限ら

ず、日本語で書いてあるテキストのなかに漢字、または漢字+仮名つまり漢字仮名交じりの文字列を文章として読めることです。いくら漢字を知っていても読めなかったら意味はありません。つまり、読むときに、欠かせない漢字能力は分析的な能力、英語でいえば *analytic competence* よりも総合的な能力 (*synthetic competence*) が必要です。それはコンテクストに置かれている、テキストの文字列、つまり語彙が読めることです。さきほどの例でいうと、「東京」は一つのことば、「国際」「空港」が一つのことばであることを知っていることと読めます。母語話者はもちろん知っているわけですが、学生は知らないのです。そこが問題です。

たとえば、

東京 = 東 + 京

ヒガシ キョウ
東 トウ + 京 ケイ
アズマ ミヤコ

→ トウ + キョウ = トウキョウ

同じように、英語の場合だと

GOOD = G (=g) + OO (=o) + D (=d) → gud (IPA)

図1 問題の定義1

それだけではなく……たとえば、

新東京国際空港 = 新+東京+国際+空港

つまり

新東京国際空港

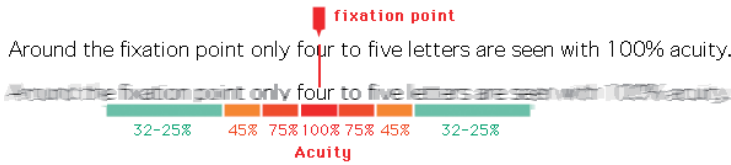


または： 新 + {東京 [国際 (空港)]}

しかし、学生は「新東京国際空港」のまえて、**新東+京** など、つまり「新しい東」の京 ? ? と読む可能性がある。

図2 問題の定義2

読むプロセスの研究によって次の事実が明らかになっている：Reading is an intensive process in which the eye quickly moves to assimilate text. Very little is actually seen accurately. (読みは徹底的なプロセスで、そのプロセスにテキストを理解するのに目が早く動き、実際、正確に(精密に)見られるのは少ない)



読むプロセスは目の **fixations** (定着、絞り込み) と **saccades** (目の早い左右の動き) の繰り返しによって行われている。人間は、**テキストにある一つひとつの語(文字)に視線を集中するのではなく、むしろ語列のいくつかの語に視線を広げて、欠けている情報を文脈によって、自分で補う**というプロセスになる可能性が高い。(Reading is performed as a series of eye **fixations** with **saccades** between them. Humans also do not appear to fixate on every word in a text, but instead fixate to some words while apparently filling in the missing information using context.) (サッカド《読書の際などの眼球の瞬間的運動》)。読むときに、目が一線一方に進むのではなく、早い左右の動きをしながら短い絞り込みをする。(During **reading**, eyes do not move continuously along a line of text, but make short rapid movement (**saccades**) intermingled with short stops (**fixations**).)

図3 読むプロセスの実際

漢字教育のなかで、漢字を一つひとつ「知る」というのは、英語でいえば **Propaedeutic**、準備研究または予備知識の能力であって、最終的な目標はテキストを読む能力を育てることです。

以上を認めれば、漢字教育と読解教育は非常に強く関係する教育分

野であるといえます。漢字教育は、やっぱり読解教育につながっていません。別々ではありません。言い換えれば、漢字教育の最終的な目標は、日本語で書いてあるテキストを読む能力を育てることになります。

私たちの学生が、どうして漢字を習うのかというと、やはり文献を読むためです。日本語で書いてある本を読むためです。いくら漢字を勉強していても、読めなかったら意味はないのです。つまり、読むプロセスは、心理言語学的であるので、そのプロセスのメカニズムを明らかにして、教育にも考慮しないと、実質的に日本語を読む能力を向上させることは難しいといえます。ですから、読む能力を育てるのならば、読むプロセスがどういふものか知らないためです。人間はどうやって文章を読むのか。そういうアプローチは理論だけに基づいているわけではなく、実際のパフォーマンスも視野に入れて、能率を高くすることを目指しています。

では、次は読むプロセスの科学的なアプローチを見てみましょう。

読むプロセスの実際

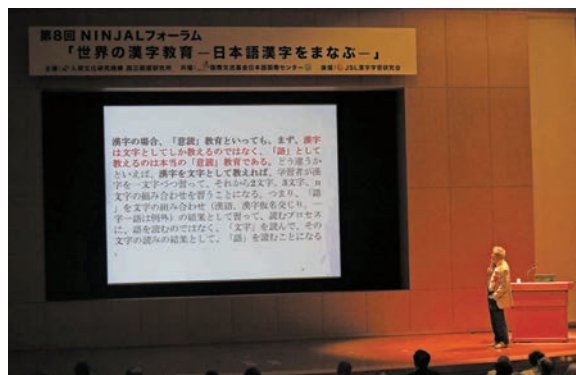
私たちは日本人が日本語を読むとか、イタリア人がイタリア語を読むとか、アメリカ人が英語を読むのは別として、一つの読むプロセスがどう行われているかを科学的に調べたら、日本語教育や漢字教育にも役立つといえます。

読むプロセスの研究によって、次の事実が明らかになっています。こういう研究をやるのはアメリカ人やイギリス人が多いようです。図3では英語で書いていますが、日本語に訳すと、「読みは徹底的なプロ

セスで、テキストを理解するのに目が早く動き、実際、正確に見られることは少ない」となります。つまり、**図3**の下は目の視線を示しています。視線は、その文章で前後がちょっとぼけていますが、はっきり見えるところは、fourと、その周りだけです。fourは一〇〇パーセントはつきり見えますけれども、onlyやisは七十五とか四十五パーセントで、このほかはほとんど見ていないのです。読むプロセスが進んでいきます。

読むプロセスは、目のFixation(着目、絞り込み)です。目の速い左右の動きの繰り返し(saccades)によって行われています。視線がいたりきたりしています。人間は、テキストにある一つひとつの語、文字に視線を集中するのではなく、むしろ語列のいくつかの語に視線を広げて、欠けている情報を文脈によって、自分で補うというプロセスになる可能性が高いのです。母語話者だと、あまりよく見えないところは自分で補うことができます。これは読むだけではなく、聞くときに一〇〇パーセントちゃんと聞いているわけではありません。はつきり聞いているところもあれば、漠然的に耳にはいる部分もあります。でも母語話者は、ことばを知っているため欠けている情報を補うことができます。読むときに、目が一線一方向に進むのではなく、早い左右の動きをしながら、短い絞り込みをします。

こういう科学的なプロセスになっています。



読解教育

読解教育には二種類あります。一つは、英語でいうSub-lexical readingで、語または形態より短い要素を読みます。その教え方は、一つひとつの文字または短い文字の組を、その発音と結びつけて教えます。それは、「文字を読む」ともいえます。語を読むのではなくて、もっと語の小さくて、短い文字を読みます。これは、私がつけた「音読」という名前です。音を読むことです。

もう一つは、Lexical readingです。つまり、語彙を読むことです。その教え方は、文字を気にせずに、語彙または語彙の組を認識して読ませることです。これは「言語を読む」といえます。さきほどは文字を読む、こちらは言語を読むです。「意読」といってもいいといえます。「表音・表意」の文字の種類と並んで、「音読・意読」という読み方と呼んでもいいといえます。

この二つの読み方は、基本的にローマ字の表音文字に使用しますが、表音文字の仮名と表意文字の漢字がある日本語にも当てはまります。しかしこれは、必ずしも仮名が音読、つまり文字を読む教育、漢字は意読、つまり語彙教育に限るのではなくて、むしろそれぞれの特徴を念頭にに入れて教育プロセスを進めるべきです。当然のことですが、仮名の場合、「音読」教育も「意読」教育もできますが、漢字の場合「音読」教育はできず、「意読」教育しかできま

せん。

漢字の場合、「意読」教育といっても、まず、漢字は文字として教えるのではなく、「語」として教えるのが本当の「意読」教育です。どう違いかといえば、漢字を文字として教えれば、学習者が漢字を一文字ずつ習って、それから二文字、三文字、n文字の組合せを習うこととなります。つまり、「語」を文字の組合せ（漢語、漢字仮名交じり。一字一語は例外）、の結果として習って、読むプロセスに、「語」を読むのではなく、「文字」を読んで、その文字の読みの結果として、「語」を読むこととなります。

これに反して、漢字を「語」として教えれば、学習者が文字を直接に「語」として習って、それから必要に応じて、「語」を分解して、文字を一つずつ認識します。漢字を文字として教え、漢語の前で組み合わせられている漢字を知っていると、ある程度、語の理解ができるというプラスの面があることはいまでもありません。漢字を「語」として教えれば、それができないのです。習うのに時間がかかります。かかりますけれども、結果的に、読み方がスムーズになります。つまり、文字を習うときに、読んで習うというのが、基本です。もし、読むことが目標であったら、やはり読んで習うのではないのでしょうか。当たり前ですよね。母語の読み手に近い、早い読み方になるといえます。この場合、文字の教え方と言語の教え方は強く結びつきます。こうすれば、日本人の読み方に近くなります。

実際の文字教育では、一方的な教え方を選ぶのではなく、やはり両方の教え方をバランスよくとったものが理想的だといえます。文字一つひとつとしての習い方と、語としての習い方です。ただ、大事な

は、文字教育のストラテジーを決める教師が、以上のメリットとデメリットを念頭に入れて、できるかぎり、自然な読み方を目指して教育プロセスを打ち出せばよいといえます。

読むプロセスでは、まず、一字または文字列のいずれの場合でも、基本は「文字認識」です。文字認識ができないと読むことができません。文字認識をしない読み方は存在しません。したがって、スムーズで、自然な読み方を習うのに、スムーズで、自然な文字認識を欠かすことができません。

しかし、以上科学的なアプローチの読み方というのは、

① 読むプロセスは、目の fixation（定着、絞り込み）と、saccades（目の早い左右の動き）の繰り返しによって行われています。

② その結果として、「読みは徹底的なプロセスで、そのプロセスにテキストを理解することに目が早く動き、実際、「正確に（精密に）」見ることは少ないのです。」というのは、普通、慢性的な文字が目にはいる。上手な文字認識は、早くて、間違いなく行うべきです。「実際、正確に（精密に）見られるのが少ない」というのは、認識の際、脳のなかで行われている文字処理は、「漠然とした形」によって認識するほかないということです。「漠然とした形」というのは、文字列のほしい「概観」による認識ということ。概観を見て、処理して、自分の文字言語の貯蔵 (repertory) に照らし合わせて認識し、それから理解するというプロセスの繰り返しになります。

漢字を知っているか知らないかという意味は、ただ、漢字貯蔵にはいつているか、はいついていないかだけではなく、もちろんはいついて

いなければ読むプロセス自体もできませんが、はいつていても、「概観」で早く、正確な取りだしができるかどうかという問題がかかわってきます。私の教え子が日本語を読むとき、すごくゆっくり時間をかけて読みます。ああこの字とか、この字だ、この二つの字の組合せはこのことばだとか。それはやはり普通の読み方ではありません。読み方に慣れていないのです。

非母語話者の学習者にとって漢字列を読む際の問題点

その「概観」で、早くて、正確に貯蔵から取りだしができることは大事なポイントです。本当は、これだけで話は長くなるのですが、その概観で速く、正確に貯蔵から取り出しができるというタスクは、非漢

字圏、非母語話者の大人学習者にとっては、つまり、外国人の大学レベルの学習者にとっては、特に漢字列を読むときになじみづらい点がいくつもあります。ここでは三点だけ取り上げることになります。

一つは、類義の漢字です。はっきり見ないので、類義の漢字が間違いやすいです。もう一つ、漢字の非局在化 (delocalization) です。そこまでの話は時間の関係で残念ながら今日はできません。もう一つは、アルファベットの線上的な文字に対して、漢字は二次元的な文字を読むことです。このポイントは私が別の論文でも書いたことがあります。本当は、最初の二つのポイントについて話して、練習問題もお見せしたかったのですが、もう時間がきてしまったようです。申し訳ありませんが、ここで終了します。ありがとうございました。